

クラシック巡礼 12

フッチーニのトスカ

サイト掲載: www.i-s-m-kk.co.jp/

2023年 4月 23日

別当 勉

<betobetoven@mail2.accsnet.ne.jp>

プロローグ

その昔、オペラのレコード観賞はけっこう面倒であった。このため、当時から長時間の歌劇のレコードを買って聴く人は、けっこう稀だった。録音演奏時間がゆうに3時間を超えるから、少なくともLP4枚ほどがセットになった分厚いボックスに収まっている。

さらに、4枚セットは買うにしても約1万円（現在価格換算：約3万円）と高額で財布は、いつの間にかかくれんぼ。聴くにも気構えが必須となる。だから、熱烈なオペラ・ファンでも時間に余裕をもって、1960年代の学生にはそんな大金、持っているわけがない。汗かいてアルバイトしてもせいぜい月2万円が限度だった。つまり、とどかない。

聴くにも、4枚ものレコード裏返しと取替え作業が必要で、一回の操作だけでも、盤面の埃を拭いてダイヤモンド針に神経使って慎重に置かなければ貴重なエポナイト盤面を傷付ける。まるで一々、看護婦が皮膚をアルコール消毒してワクチン注射をするように。大体片面30分ごとに6回以上も繰り返さなければいけないから、うんざりするのが常人の感覚だ。たとい、大いなるクラシック・フリークであっても。

1950年代までは50分～60分の交響曲1曲でもSPレコード：5～6枚セットで販売されていたようだから、当時のクラシック音楽の本格マニアにはそれほど気にならなかったらしい。いま思えば、ほんとに彼らは我慢強かった。

金も遣って神経も使ってやっと聴き始めると、聴いている途中で緊張がほぐれ、不謹慎にも眠ってしまう。どこかの市議会議員のように。それを無理やりに居眠り厳禁にしたら、仕返しに、その規則と罰則を定めた人は逆に全行動の映像を撮られ、日本中にYouTubeでばらまかれること間違いない。

だからと言って、私の居眠り常習癖に対する免罪を要求しているものではない。それほど、3時間を超える音楽鑑賞は、眠るまいと抵抗すればするほど神経を擦り減らしてしまうと言いたいのである。真に生真面目なファンは、レコードの取扱いで、なかば★PTSDになる。レコードに針を静かに落とすだけの操作でも他人はおろか家族にもやらせないフリーク（病的マニア）もいたほどだから。現在でも、そういったフリークは、シーラカンスのように絶滅を逃れて、サバイバルしている。

オペラ鑑賞

このため、昔のオペラ鑑賞は1日にLP1枚1時間とブツ切りで聴いて神経を和らげたはずだ。抜本的には、五味康祐のように、★5百万円（現在価格：約5千万円）もするスイス製スチューダーか米国製アンペックスのプロ用オープンデッキ・テープレコーダーを輸入して買って、それにLP4～5枚まとめて2トラック10号リールに録音して聴くファンもいた。4トラック・ヘッド装備を特注すれば、オートリバース機能を付けて、3時間なら10号リール1巻に19cm/sの速度設定つまり上級の録音品質で済む。半分の9.5cm/sにすれば計6時間も録音できる。つまり、1回デッキにテープを掛ければそのまま放置して3時間など、軽く演奏してくれる。私も、これを夢見たが物凄い高額のためあきらめた。

また、欧米では、当時、LP5枚ほどを重ねてターン・テーブルのセンター・スピンドルの上に乗せて自動的にまとめて演奏できる★オートチェンジャー付プレーヤーも発売されていた。

そのためのレコードのプレス順を、例えば4枚セットとすれば、<1,2 3,4 5,6 7,8>という順当なレコード面番号を<1,8 2,7 3,6 4,5>という具合にした輸入盤もあったほど。私は、アルヒーフ盤（ドイツ製）のバッハ『マタイ受難曲』4枚組を50年前に友人から譲り受けていたが、盤面のナンバーは正にその順である。ものすごく面倒だから、4トラック7号のオープン・リール：2巻に録って聴いてきた。そんな労苦も、いまやマタイのCD版を買ってPCにリップング（CDコピー）すれば、マタイの3.5時間なぞ一挙に再生できるから、真夏の夢のごとく霧消している。



Studer A80

<https://simplestudio.jp/gears-chronicles/studer-willi-studer-history/>



アンペックス ATR-102

<https://aucfree.com/items/r272509460>



オートチェンジャー機能付

アナログ・レコードプレーヤー Dual 1019

https://note.com/bach_kantaten/n/n66ed81615bdf

結果として、当時の私はライブでのオペラ鑑賞をあきらめた。ところが、デジタル技術の発達に伴い、20年ほど経つと、CDやレーザーディスクなどが開発・販売され、パソコンも高性能化されたことから数時間のクラシック音楽が一举に再生・鑑賞できることになった。当然ながら、レコードを掛け替える手間も不要となった。有難かった。神経も助かった。

しかしながら、CDフォーマットはアナログ音響の全成分を符号化（デジタル化）できない。つまり、理論的にも完全にアナ・デジ：AD変換できないのだ。例えば、周波数帯域、ダイナミックレンジ、打撃音（特にピアノとドラムス）のためのインパルス応答、ホール残響特性などは、ある程度、切り捨てられてしまうので、オーディオ・フリーク（音キチ）は50年前の優秀録音LPレコードの再生に拘り、いまだに高価な再生機器を備えて楽しんでいる。ただし、多くはなく、絶滅危惧種にちかい。でも、マニアもメーカーもしぶとく生き残っている。何故か？ 真空管アンプの数々の名作を残した稀代のオーディオ・エンジニア、故上杉佳朗氏が言っていた。帯域を制限して縮めた（音質を制限した）のは、デジタル化であると。デジタル化とは、音響特性すべてを域限定しないと符号化できない宿命にある。

このため、最近では高度化してやまないデジタル技術に物言わせて、人間の耳の特性帯域を超えて、符号化幅を拡げている。が、最終的には、聴取者が接する世界のデファクトたるCDの狭い特性限界に泣いてしまう。それは、1980年のソニー・フィリップスの短慮的見通しによる。いわば、エヴォリューション（進化）していく未来特性を担ったCDフォーマットを仕込めなかったことにある。技術人間の短慮が露呈した。つまりデファクトに拘らざるを得なかったのだ。市場ニーズの基本のデファクトだから、無視すれば流通しない。そのため、見切って将来標準まで見通す努力と技術開発をあきらめた。反面、世界の市場を席捲できるという特典を獲得できたのである。

ところで、車の運転機能もデファクトだらけであるから、EVの強敵となる。つまり、テスラのEV自動車の運転機能の装備でも、現在の技術で見切るから、AI実装においてそこかしこに未熟という地雷が埋まっている。AIの天敵は、天候とか、通行人であり、とにかく不規則で不純な確率過程だらけの自然現象は、読みきれないのだ。つまり、神々の仕業が絶え間なくやってくる。今は、ドライバーという人間がそれを捌いているが、不確かな限界（ミス）に、目いっぱい、警察の交通警邏隊も悩まされている。

極める

趣味に人生すべてを賭けるということは、どういうことなのだろうか。私は“音キチ”であるが、人生の全てを注ぎ込むほどの“病的キチガイ＝フリーク”ではない。その意味では、半端なのである。逆に、私はレコードのオリジナル・レコーディング音質に期待を寄せて、レコード芸術誌が評価した名演と優秀録音を追求してきたので、“音キチ”という文明社会の病人にはならなかった。さらには、クラシック音楽を隅々まで探求す

ることに興味が行き届き、いい録音もダメなものも名曲に拘ったので、ハイファイ音質を執拗に選り好みせずに聴くことができた。

しかしながら、私は彼ら“音キチ”の真髄を知っている。とにかく

「究極の透明度：ハイ・ファイディリティ」

つまり、「いま、そこにいるバンドが聴覚だけで見えること、究極のプレゼンス（存在感）」が感じ取れること。そんなハイファイ再生音を期待して止まない求道者なのだ。裏切られたら、そのレコードを叩き壊すだけにとどまらず自殺しかねないほど落ち込むのだから、これを病気と言わずして何と云えばいいのだろうか。しかも、惚れた花魁に注ぐように、ありったけの身上を捧げてしまう。フリークの度合いによっては家庭も犠牲になるかもしれない。

結果として、現実の楽器とそれがつむぐ音楽が目の前に現れるまで許さない。ただし、本人自身は、名録音評価には自信がないのも悲劇である。実際のライブを、コンサート・ホールやジャズ・クラブに足を運んで聴いてないから本物の音を脳裏に刻まれてないので、比較は不可能なのだ。だから、音キチの言論はあまり信用されない。自分に評価値の原点が無いから、自然に、他人の評価した録音品質にこだわる。そして、見事に、最も大事な名演奏をやりすごしている。

さらに、録音・再生には、限界があるのだ、と言われても軽く受け流されてしまう。しかし、あの音は良かったな、と誰かの感想を聞いた途端に胸はざわつき、追求が始まる。そして、その再生が思いどおりにならなければ、せっかく揃えた何百万円もする再生機器の取替えを夢想して止まない。そして、あれやこれやと、ついには数千万円も注ぎ込んでしまう。結局、名曲、名演奏を置き去りにして

すなわち、レコード鑑賞は自ずから、

名曲：X、 名演奏：Y、 名録音：Z

という三次元の座標軸で聴くべきものなのである。ハイファイ・フリークの欠陥は、まさに、Z軸の名録音の一次元でしか聴いていないことにあるから、下手な演奏でも録音が良ければ、腰を入れて聴いて独り興じている。さりながら、実際は、音楽雑誌などにて優秀録音に注目して判断しているから、雑誌社の選別でひどい演奏が採用されることは少ないので、問題は余りない。

「馬鹿は死ななきゃ治らない」のごとく、莫大な経費を使って遊びのお城の築城ともいえる趣味、それは見事なオーディオ機器類がピカピカの墓石の如く摘みあがったまま、と同じで、やがて本人は他界してしまう。そして、答えに辿り着いたのかと、生前に問えば、ひとこと「まだだ」と言うだけ。私が惚れ込んだ『音楽巡礼』を書いた五味康祐がそうだった。さすがに、彼はXYZを真摯に守っていたことは当然である。さらには、彼の特長として、隠れたる名曲と名演奏を発掘してきたことは、大きく評価したい。それが彼の『音楽巡礼』の大いなる魅力だった。

稀代のオペラ求道士ワーグナーが説いた中世騎士道物語に憑かれたドイツのバイエルン王ルードヴィッヒ二世は、『白鳥の湖』に出てきてもおかしくないノイシュヴァンシュタイン城（右図）を、なんと1880年頃に建築してしまった。投資額は、おそらく今の価値に換算して数百億円と言われ、借金も同程度額は残ったようだ。王様の趣味が昂じると国を潰すという典型だ。



https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Neuschwanstein_castle.jpg

でも、彼はビスマルクのプロイセン王国（やがてのドイツ帝国）統一戦には、抵抗せず、一早く敬礼して、負債だらけの★バイエルン侯国をまるごと捧げたという。私は、そのお城を直に観てきたが、確かに“お伽話”のお城で、大砲が轟く近代戦では、保ちそうもない。あくまでも十字軍時代の弓矢と刀槍の戦いを想定していることが判った。でも、ルードヴィッヒ王は完成後、数年は住まったらしいが、まもなくして、借金地獄に喘いだ家臣団に追放されて孤独のうちに他界した

一国の王も贅沢三昧の趣味に溺れれば「国やぶれて城郭あり」となった典型例である。皮肉にも、現在は、ロマンチック街道ツアーにおける随一の観光名所として賑わっている。ワーグナーが悪いとは、私は言わない。ワーグナーが夢見たゲルマン神話は、とにかくギリシャ神話や北欧神話に憧れたものの、あくまでも己の楽劇台本で実現するものであり、現実とは乖離している。いわば、歌劇のためのお伽話であり、それを本気で実行するかどうかは、一個人の精神問題にあらう。というよりも、新しい演劇世界の創作があったのかどうかであらう。人は、あくまでも人と人の中に夢という次元の創作を編み出せるかどうかなのだ。そのフィクションにより人々の心に豊かさを贈れる。蓋し、永遠の課題である。王は、国民に夢を贈ることが絶対の天命なのであるが。ルードヴィッヒ王は「己の夢」を求めてしまって、それが解らなかった。

ライブ愛好家

それにしても、ライブ愛好家はそんなレコードの再生事情なぞ気にもかけていない。オペラ・ファンは観劇が基本と観念して、歌舞伎や大相撲のごとくあいもかわらずせつせと疲れも知らずに劇場に通っている。私は再生音楽の鑑賞に拘ったから、ライブ・コンサートには興味が湧かなかった。けれど、P O P Sでも特別に好きな吉田拓郎やエリック・クラプトンのコンサートには3回ほど、奇跡的に足を運んだが、その満場の観衆の熱狂度には度肝を抜かれた。とにかく凄まじい。たぶん、ミュージシャンもファンもその喝采という禁断症状に苛まれてライブは辞められないようだ。が、反面、売れない音楽家（芸術家）は死にたいほど落ち込んできているのかもしれない。人気というものには不人気に対して冷酷である。つまり、人気の原子核は『創作』である。それが枯渇

すれば売れなくなり、時間とともに落ち込んで消えるしかない。

85歳になっても、アルト・サクソ・プレーヤーの渡辺貞夫は、ジャズ・コンサートを演じてかつ定期的に自作オリジナルを創作し、発表し続けて、観衆の興味を惹きつけてライブをこなしている。だから、元気だ。

そうはいかない、くたびれたアーティスト難民があふれる事態を憂いたのかもしれないが、ヴェルディはミラノに引退した音楽家のための養老院「カーサ・ディ・リポーゾ：憩いの家」を建てて分け隔てなく提供したことは有名な話である。大家の余裕の篤志であり、貯まった莫大なギャラの使い道として貧民芸術家への施しを考え付いたのであろう。

歌劇というもの

オペラは人々を観劇に誘い込む。しかも、見晴らしの良いバルコニー席（いわばホール側面の壁および最後部の壁際に二階席以上に造り込んだの洋式栈敷のようなもの）においては高級レストランのメニューで華美な飲食なども提供されるから、商談・接待などでオペラに興味ない人でも誘われ、招待されると足を運んでしまう。そして、オペラ全体よりもアリアに加えて美味しいディナーに魅入られて味を占めてしまう。大相撲の栈敷同様、好きな力士の取組には我を忘れて観てしまうことと同じであろうか。

世界で最も有名な歌劇場のひとつであるミラノのスカラ座



<https://www.getyourguide.jp/mirano-1139/miranosukarazuo-sukarazuo-bo-wu-guan-jian-xue-tsua-t24640/>

いったん、とある『アリア』が一人の観衆の心の琴線に触れたとたん、豪華な舞台デザインと衣装にも印象付けられ、あっというまに彼は常連になってしまう。それは江戸

の歌舞伎も同じだった。地球の裏表も離れていながら、そういった娯楽、エンターテインメントはまさに、同様に、発展して庶民生活を豊かにしてきたのだ。

その意味で、交響曲やピアノソナタなどのクラシック純音楽とは聴き方が明らかに違う。そういった正道の音楽では、聴衆の行儀の良さが求められる。ワインを呑みながら、食事をしながらという、なかばいい加減な聴き方は許されない。が、わずかながら例外もある。ドイツなどのサマー・野外コンサートではステージから遠く離れた芝生の自由席で彼女と寝転んで聴いている若者も少なくない。

さて、別の側面をみると、オペラには特別な音楽、すなわち『アリア』がある。これは単独でも演奏され、それだけ録音されて特集オムニバス・アルバムで発売される。これにより、ライブに行かない人もそれなりに歌劇のいいところを鑑賞できる。私の場合、そのケースに当てはまる。こういった特質は歌劇にしかない。たぶん、19世紀当時は、★ガラ・コンサートが流行っていたから、『アリア』の特集が組まれるケースも多いので、作曲家は捩じり鉢巻き腕まくりしながら『アリア』を拵えてきたのだ。これがオペラの最大の特徴となろう。ミュージカルにもそのような特質はあるが、音楽性など比べる気にもならないし、比べること自体、破廉恥である。歌劇は“歌”が基本であり、劇の調味料ではない。すなわち、なによりも歌が映えることが絶対条件なのである。管弦楽も、合唱団も、舞台飾りも、衣装も、残りすべてが付録とされている。だからといってそれらの一つでも手を抜けば、『アリア』が映えなくなる。

プッチーニはそれに拘った。だから、ドラマチックでロマンチックな“トスカ”のオペラ化権は欲しくてしょうもなく、他にいくらでもあった脚本には見向きもせず、プロデューサーにすがりついた。そのプロデューサーは、さすがにプッチーニの情熱にほだされ、詐欺まがいの交渉でオペラ化権を有している音楽家からその権利を買い取った。売り渡した彼は、まさか、その“トスカ”がオペラ史上、世界中で最高の人気を博して、数億ドル（数百億円）の稼ぎになるとは、夢想だにしていなかった。

ガラ・コンサートとはもともと、「正装コンサート」の意味で、何かを記念して行なわれる特別な演奏会のことをいう。ちなみに「ガラ」の語源は洋服のひだつきのふち飾りのことで、男性が燕尾服やタキシードの中に着るドレスシャツのフリルの前立てを思っただけであればいい。なるほど、こうした服装は正装が指定されている場でなければお目にかかれぬ。ただ、日本でガラ・コンサートといった場合、必ずしも正装がドレスコードに指定されているとは限らず、「祝賀演奏会」「特別演奏会」に対してこの名称が用いられていることが多いように思われる。もちろんその内容は、祝賀にふさわしく、ソリスト(独奏者、独唱者)の演奏を中心に組み立てられていることが多く、全体的に華やかで美しい曲が登場するのが特徴だ。

< http://www.nikikai.net/enjoy/vol288_03.html >

私のトゥッカータ（取っ掛かり）

いつもながら、オペラについても私の心の琴線を鳴らした美曲に囚われようとしてきた。わざわざ蟻地獄に落ち込むように、私の生涯ではそんな名曲、麗曲に当たるまで、あれこれとピンからキリまで飽きることなく聴いてきた。我ながらあつ晴れな根性でもあるが、友人たちは信じられないという顔していた。しかも、クラシック巡礼シリーズで20人ほどの名作曲家：マエストロを取り上げて語るつもりだ、と言い切ったときに、かなりのインテリ知人も呆気にとられた顔をした。半分、出来っこないさと。それが5年前で、すでに11人のマエストロを取り上げてきた。そのような実績を積み上げた現在、その友人は、もう背比べは諦めた顔をしたが、決して誉めなかった。インテリぶった有名大学歴の人々の弱さかもしれない。

さて、オペラ作曲家のプッチーニである。この人の作品は、見事に世界一周している。当時としては、まもなく映画化される「★80日間世界一周」という小説が流行った時代だから、当たり前といえばそれまでであるが。他に、そういった作曲家はほとんどいない。強いて挙げれば、他の分野になるが、アインシュタインぐらい。彼は、なんと、戦前に米国横断しながらはるばると船で大正時代の日本にきたことは、日本のポテンシャルが科学も芸術も国力も世界レベルで目立っていたという証であろうか。私は日本人として誠に晴れがましい。

また、プッチーニの十八番は、ソプラノ歌手を主人公にしたストーリーだ。いずれの歌劇も、極上の別嬪がプリマドンナである。だから、悲劇が多い。もっとも、喜劇にしたければオペラ・ブッフアという形態を選ぶことになるのだが、プッチーニはそうしなかった。

プッチーニが選んだ歌劇は、イタリア本国から始まり、『ラ・ボエーム』のパリの東欧人（チェコなどのボヘミア地方）、『蝶々夫人』の日本、『西部の娘』のアメリカ、『トゥーランドット』の中国王朝などことごとく名作を刻み、いまだに止むことなく世界中で愛され上演されてきている。まさに、国際性豊かな歌劇作曲家だった。日本人としては長崎を舞台にした『蝶々夫人』のオペラが超有名になったことは、実に喜悅の限りである。19世紀アジアの開発途上の貧乏島国がこれほど注目されてきたことにも驚きを禁じ得ない。同時代のゴッホにも、モネにも日本の広重の版画が研究されて彼らの糧になったことも自信を覚える。1868年の明治維新前後、汗だくで気力だけで立っている幼児のような明治政府のなけなしの予算からけっこうな旅費をつかって日本への政治・文化や科学技術の移入とともに、幼稚な国家のPRのため涙ぐましいほど欧米に奔走した先人たちの邁進に頼ずりたいほど感激している。己たちのみすぼらしさをかなぐり捨てた、意気軒高たるとんでもない猪突猛進民族なのだ。蓋し、切先の鋭利なプロジェクトXジャパンを標榜して。この日本の打上げは、欧米に追いつき、ただ、世界の第一線に立ちたかったのだ。いまや堂々とG7を牽引している。

私はロンドンでビジネスを運用して、様々な欧州人と付き合ったが、彼らは一様に日本人に特別な敬意を払っていた。すなわち、「隅に置けない」という。「日本人はなかな

かギブアップしない。とことん闘う。」と言われたが。

だから、原爆を落とされたのだと、私は内心青ざめた。

居眠り鑑賞

そんな想いに振り回されながら、ふと「トスカ」という短くもゆかしい題名の歌劇に興味を持った。ベータやVHSのビデオ・デッキが流行り出した80年代である。ついに、レーザーディスクが世に出て、オペラの全曲盤を手に入れた。1985年頃である。そして、じっくりと観劇しだしたが、いつのまにか、私というフリークは、いつものように気持ちよく居眠り出した。全く、聴いても観てもいない。ただ、居眠りに興じただけだった。さすがに無様である。でも、その気が抜けた、緊張がない姿勢には毎度のことながら、素人の音楽鑑賞の有力な方法なのだと、勝手に合点していた。怖ろしいほどの身勝手。相当の投資をして揃えた音響画像機器は悲しんでいた。そのままであったら、今の私だったら誰かに鬼の棍棒で頭を叩かれて昏倒してしまうのだが。

むかし、19歳の時、ベートーヴェンのピアノソナタ「テンペスト」を初めて聴いた時もそうだった。まったく同じように、途中で強烈なソプラノの aria に覚醒させられた。いや叩き起こされたのだ。それほど、凄まじい絶唱だった。絶叫と言ったほうがよい。「やかましい」という感覚を通り越している。いつのまにか私は身震いして寝惚けていても「感涙を浮かべていた」。

それが、トスカの

『歌に生き、恋に生き』

という絶品 aria だったのだ。



<https://www.gqjapan.jp/culture/article/20200528-tosca>

それから完璧にトスカの虜になってしまった。まさに、”テンペスト”（クラシック巡礼第1回『ルードヴィッヒの夢』）の時の再現だ。

そして、何度も聴き返すが、それまでとぼしてきた物語を克明にたどって、歌詞本を読みながら、レシタティーフもきちんと解しながら、信じられないほど、全曲を真剣に聴き始めた。以後、毎度のように歌詞本を追いながら鑑賞する真面目さに、そんな疲れを知らない、十八番の居眠りさえ棚上げしている自分に呆れた。でも歌劇場に行こうとは露とも思わなかった。これがオーディオ・ファンたるクラシック愛好家のどうしようもない性癖なのだ。死んでも治らない。

だが、よかった。なかば食わず嫌いだったオペラに取り込まれて捕り憑かれて。そう、入口はたった4分間の1曲なのである。あとは、その曲がガイドになり、その世界をくまなく見せてくれるのだから。

歌に生き、愛に生き(恋に生き) オペラ「トスカ Tosca」第2幕より
プッチーニ (Giacomo Puccini/1858-1924)

<https://www.worldfolksong.com/classical/puccini/tosca-vissi-darte.htm>

Vissi d'arte, vissi d'amore, non feci mai male ad anima viva! Con man furtiva quante miserie conobbi aiutai.	私は歌に生き 愛に生き 他人を害することなく 困った人がいれば そっと手を差し伸べてきました
Sempre con fè sincera la mia preghiera ai santi tabernacoli salì. Sempre con fè sincera diedi fiori agli altar.	常に誠の信仰をもって 私の祈りは聖なる祭壇へ昇り 常に誠の信仰をもって 祭壇へ花を捧げてきました
Nell'ora del dolore perché, perché, Signore, perché me ne rimunerai così?	なのにこの苦難の中 なぜ 何故に セニョール(スカルピアのこと) 何故このような報いを与えになるのですか?
Diedi gioielli della Madonna al manto, e diedi il canto agli astri, al ciel, che ne ridean più belli.	聖母様の衣に宝石を捧げ 星々と空に歌を捧げ いっそう美しく輝いた星々
Nell'ora del dolore, perché, perché, Signore, ah, perché me ne rimunerai così?	なのにこの苦難の中 なぜ 何故に セニョール(スカルピアのこと) 何故このような報いを与えになるのですか?

とにかく、そのアリアは、セニョール（スカルピア）にすぎる真摯な訴状のセリフがすごい。彼女の一途な純真さを歌い上げるバラードが情景を語り、思わず同情してしまう。私の魂も根こそぎ持っていかれて、やがてクライマックスにおけるトスカの絶叫に、身も心も全てが核融合して爆発してしまう。

いま振り返ると、モーツァルトの『フィガロの結婚』、ビゼーの『カルメン』、ヴェルディの『椿姫』、ベルリーニの『ノルマ』、ワーグナーの『タンホイザー』、『ワルキューレ』、『トリスタンとイゾルデ』など、いつのまにか好きな歌劇のディスクグラフィーを積んできた。でも、10曲に満たないから、まだ幼稚なレベルなのだが、懐かしさはいっぱいである。巡礼するには十分なランドマーク（道標）となろう。

アリアの特徴

基本は、劇の山場で歌われるものである。それを構成する感情の推移は、
「情景、悲嘆、熱情」

という三節になろうか。いずれにしても感情の起伏は画幅を超越するほどである。桃山時代の俵屋宗達すら描き切れまい。ただし、モーツァルトがイタリアで学んで手中にしたオペラ・ブッフアや、ウィーンで流行った喜歌劇：オペレッタのような類いでは、それほどの激しい感情の起伏はない。

その辺りの分類・思考は余り見受けられないが、地中海のイタリア節は、現在の★カンツォーネに引き継がれているのではないだろうか。あるいは、逆にオペラのアリアが影響を受けたのかもしれない。

カンツォーネ[canzone]: イタリアの代表的なポピュラー・ミュージックのこと。本来のイタリア語の意味は“歌”というだけで特にジャンルを示すものではないが、一般的にはイタリアの太陽や国民性を思わせるような明るく、朗々と歌い上げられる曲を指す。

[カンツォーネ 特徴 - Google 検索](#)

カンツォン(カンツォーナ)はイタリア語ですが、フランスのシャンソンと語源は一緒です。オペラはそういうカンツォンやシャンソンを組み合わせ、さらに演技も加え音楽劇として成立させたものが始まり。つまりカンツォンはオペラの素材ということになります。

https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1155596611

トスカとは

絶世の美女であり、ローマでは随一の歌姫であるが、周りのちやほやに関係なく、心根の一途な女性であった。惚れ抜いた男とは身も心も一体化してしまう。だから、他人には細くて見えないチタン線の結界を張る。そして、一切の打算（比較）が働かない。彼女には選択肢が無いのである。すべて一択であり、その根性も筋金入り。しかも、色艶が全身を覆っているから、最愛の彼氏でも始末に終えない。

このようなトスカの巖然たる結界を土足で踏み躪ってしまう不届き者がいた。そのために、演劇史上、稀にみる惨劇になってしまう。たぶん、演劇では表現仕切れない物語かもしれない。

現代の映画製作においても、いくら画像処理の粋を集めて拵えたとしても、とらえきれない異次元がある。つまり、“歌”が不可欠なのである。“歌”には、恋情は勿論、悲劇でもロマンがある。あの世もある。神の登場も使える。舞台が無限なのである。やがて、私も突入してしまうワーグナーの“神話”の世界もある。これじゃ、ほかのいかなる芝居も映画も敵うわけがない。

そんなオペラの主人公がトスカなのである。

物語、歌、管弦楽、舞台という四次元空間を演出するには、どうしても“歌”をいかに盛り込んで映えさせられるか。この問題に気付いたのは、ワーグナーであった。ヴェルディと同年の作曲家ではあるが、文化ポテンシャルの高さが圧倒して、結局、ヴェルディはワーグナーの管弦楽宇宙に魅了されてしまい、晩年、オーケストレーションではかなりの影響を受けた。具体的には、ヴェルディを手伝ったイタリアのオペラ作曲家・台本作家：アッリーゴ・ボイトなどは、ワーグナーの楽劇管弦楽法に魅入られ、いつのまにか取り込まれて、ヴェルディにまで波及してしまったのだ。ただし、イタリアのオペラ界は、文化イデオロギー的にワーグナーを嫌っていた。

ただし、現代のドイツの歌劇や楽劇の舞台演出は、経済性追求もあって簡略化しすぎて抽象化に走ってしまっている。煌びやかなイタリア歌劇のように舞台も楽しみたいと期待する観客は落胆している。悲しいかな、ワーグナーの意向が忘却されているのだ。私も、NHK-B Sプレミアムで放送されるドイツのオペラ（楽劇）をそれなりに期待しながら録画して観たが、余りにもシンプルすぎる舞台演出に期待外れでがっかり。企業における業務の効率化を指向してシンプルにしてしまうIT化のごとき味気無さがある。即座に録画自体を消去した。なら、CDで「物語、歌、管弦楽」の三次元で充分と思っている。DVDすら必要ない。イタリア歌劇の舞台の豪華さは必須なのであるから、ひどすぎる

着流しの高倉健が出演しない任侠映画は、実に、味気ない。

プッチーニとは 【ジャコモ・プッチーニ: Giacomo Puccini (1858 - 1924)】

(1) プロファイル:

プッチーニの正式なフルネームは、ジャコモ・アントニオ・ドメニコ・ミケーレ・セコンド・マリア・プッチーニ Giacomo Antonio Domenico Michele Secondo Maria Puccini である。プッチーニ家第二代目から続いてきた音楽家の名を付けているので、このような長い名前となった。プッチーニ家は父祖伝来の音楽家の家系であったのである。そのプッチーニ家として第六代目に当たり、音楽家としては第五代目に当たるのがプッチーニである。

イタリア、ワインの里でも有名なトスカーナ地方の田舎町ルッカに生まれた。彼は、生まれて既に職業が決められていた。昭和初期の農家の長男坊と同じである。代々、プッチーニ家は、18世紀から連綿と続くルッカの宗教音楽家の家系である

ルッカ



[イタリア ルッカ 地図 - Bing images](#)

イタリアのトスカーナ、風光明媚なルッカ県にある都市ルッカは、もともとエトルリア人によって開かれた街だが、古代ローマによるイタリア統一の過程でローマ人が住民の大半を占めるようになった街。

ジャコモ・プッチーニはプッチーニ家六代目、音楽家としては5代目を継承することになった。トスカーナ北部の古い伝統的な町ルッカで生まれ育った。1864年、プッチーニ家5代目ミケーレ（父）が、妻アルビーナと7人の子供を残して死んだ。未亡人は33歳、5人の女の子と2人の男の子を抱かえていた。上から5番目がジャコモ・プッチーニで6歳であった。父の死後、だれもが彼に音楽家としての期待をかけたが、幼い頃は特に音楽的才能を発揮することもなく、学校の成績もよくなかった。それでも母は貧しい中でも彼に音楽教育をするのを怠らず、亡夫ミケーレの弟子アンジェローニはじめルッカのすぐれた音楽家たちの指導を受けさせた。

プッチーニ家系

初代 プッチーニ Puccini:

1700年代のはじめ頃、単身でイタリア・トスカーナのチェッレ Celle という小さな村からルッカにやって来て住み始めた。ルッカで妻をめとり子供たちをもうけたが、職業や名などは明らかではない。姓のプッチーニだけが伝えられ、名は分かっていない。生年・没年も明らかではない。

二代目 ジャコモ Giacomo (1712-81) +69 歳:

ジャコモは中世以来の歴史をもつベネディクト会大修道院附属ルッカ音楽院で学び、ボローニャでも研鑽した。有名なジョヴァンニ・バプティスタ・マルティーニ神父（1706-84）に指導を受けたともいわれているが、明らかではない。ルッカのサン・ミケーレ教会を中心に活躍した教会音楽家であった。

三代目 アントニオ・ベネデット・マリア Antonio Benedetto Maria (1747-1832) +85 歳:

アントニオは先代ジャコモと同じくルッカ音楽院で学び、ボローニャで研鑽した。彼のボローニャでの友人の妹でかなりの名声をもった女流作曲家、オルガニストカテリーナ・テセイ Caterina Tesei を妻として、ルッカに連れ帰った。彼はプッチーニ家でオペラの才能を示した最初の人であった。

1771年アントニオは対位法の試験にパスし、ボローニャのアカデミア・デイ・フィルハーモニチ Accademia dei Filarmonici（音楽家学士院）への入会を許された。このアカデミアは、この前年（1770年）にマルティーニ神父が彼の弟子モーツァルト Mozart オーストリア（1756-91）（当時14歳、第一回目のイタリア旅行中であった）に試験を受けさせ、会員資格は満20歳以上の規定にも拘わらず満場一致で会員に推挙された学士院であった。

この時アントニオも居合わせ、羨望の眼で神童アマデウスを見ていたかもしれない。

四代目 ドメニコ・ヴィンチェンツィオ Domenico Vincenzo (1771-1815) +41 歳:

このドメニコによってドラマ的要素が、プッチーニ家の音楽家に導入されたと言える。そして彼の音楽の特徴は、うっとりさせる旋律にあった。

五代目 ミケーレ Michele (1813-64) +51 歳:

ミケーレは先祖たちと同じくボローニャで研鑽し、ナポリにも行き、**ドニゼッティ** (1797-1848) とメルカダンテ Mercadante イタリア (1795-1870) にも師事している。彼は理論家、教師としての名声が高く、多年にわたってルッカ音楽院の院長を務めた。

プッチーニ家の住まいはルッカのポッジオ通り、ジャコモ少年はすぐ近くのサン・マルティーノ教会へ通った。オルガニストを務めていたが、彼の好む任務ではなくオルガンも好きな楽器でもなかった。こうした時、師**アンジェローニ**によってオペラへの興味が始まった。

【歌劇へのめり込み】

アンジェローニがヴェルディの「リゴレット」、「椿姫」、「イル・トロヴァトーレ」等をプッチーニに紹介した。こうして1876年(8歳)にルッカから往復歩いてピサで上演されていた

「アイーダ」

を見に出かけた。このことはプッチーニの生涯のうちで最も決定的な影響を与える出来事となった。それは彼にオペラへの開眼をもたらし、ミラノ王立音楽院を受験することを決意させたのである。ミラノ音楽院はオペラの作曲のために最重要な存在であった。

プッチーニがミラノに行くに当たって、母親は資金集めに奔走する。1880年(22歳)の秋、ルッカのパティーニ音楽院の卒業証書とマルゲリータ女王育英資金をもって、ミラノへおもむいた。見事一番の点数で音楽院合格を果たし、12月16日に授業は始まった。作曲の担当教授はバッツィーニ(1818-97)とポンキエルリ(1834-86)であった。

ポンキエルリは、当時有名なオペラ作曲家であり、より直接的な影響をプッチーニに与えた。現在でもよく上演されるオペラ『ラ・ジョコンダ』はよく知られ、ヴァーグナー派の管弦楽重点主義に対して、彼は声楽に優位をおく考えをもっていた。プッチーニはこの二人のよい要素を、ほどよく継承した。

恵まれた師のもとにいたと思われるが、それでもプッチーニには不満が多くあった。勤勉なタイプの学生でもなかった。

学生生活は貧しく、下宿では、音楽院同門の後輩の**マスカーニ**(1863-1945)と一時同居した。当時、マスカーニは1年そこそこで音楽院を中退し、旅回りのオペラ団の指揮者になった。こうした乞食暮らしは後の『ラ・ボエーム』に反映するが、このような経済的に恵まれない生活は、大当たりする『マノン・レスコー』初演(1893年(35歳))後まで続くことになる。

プッチーニにとってミラノにおける生活で最も重要なことは、オペラを観ること

であった。こうした状況で特にビゼーの「カルメン」やカタラーニの「デヤニーチェ」から多いに啓発を受けた。カタラーニとは親交を結び、多くの影響も受けている。

「交響的奇想曲」

音楽院の卒業作品の管弦楽曲『交響的奇想曲』は、1883年（25歳）に音楽院管弦楽団で初演され、大好評を得た。しかし、目先の問題は定職のない彼にとって、生活費：収入はどうするかであった。ルッカにいる母も長患いが始まった（1884年に死去）。ルッカではパティエニ音楽院から教授になる申し入れもあったが、教えることに向いてない彼は教授職を志望しなかった。ミラノで活躍するためにはオペラを書かなくてはならない。

出版社ソンゾーニョ社

折しも、この年1883年から1幕ものの出版社**ソンゾーニョ社**主催によるオペラ・コンクールが開催されることになった。そこで彼は締め切り（12月31日）に6ヶ月しかなかったが、「ジゼル」と同じ題材「レ・ヴィッリ Le villi（妖精）」を仕上げて応募した。結果は落選であったが、この1幕のオペラ「レ・ヴィッリ」は1884年3月31日、ミラノのダル・ヴェルメ劇場で初演された。

中には器楽作曲家もいた。この中で唯一オペラ作曲家を目指し、なおかつ今日、世界的歌劇音楽家として名声を残したのがジャコモ・プッチーニである。

最初は教会オルガニストの職を得るが、45歳年上の巨匠ヴェルディのオペラ『アイダ』を観劇して、心を打たれ、オペラ作曲家を志した。

1880年、22歳で『4声のミサ曲』（『グローリア・ミサ』の名で知られる）の完成をもって、初期の音楽修業と、家業である宗教音楽家の道に区切りをつける。

リコルディ出版社

その結果はまずまずの成功で、**リコルディ**出版社はこのオペラの全権利をしっかりと取得した。そしてリコルディの忠告に従い2幕ものに改作してトリノで上演され（1884年12月26日王立劇場）、ミラノと同じく成功を収めた。

この出版社の社長**リコルディ**は、プッチーニ作品の制作など徹底してサポートして台本作成から歌手選定、劇場の手配など、今でいえばプロデューサーのような仕事を担って、プッチーニを手厚く支援した。

昇竜の勢い

第三作の『マノン・レスコー』（1893年初演：35歳）は大成功となったばかりか、イタリア随一の歌劇作曲家に祭り上げられた。加えて、優れた台本作家ルイージ・イルリカとジュゼッペ・ジャコーザの協力を得ながら、この2人の協力のもとに、

『ラ・ボエーム』

1896年初演

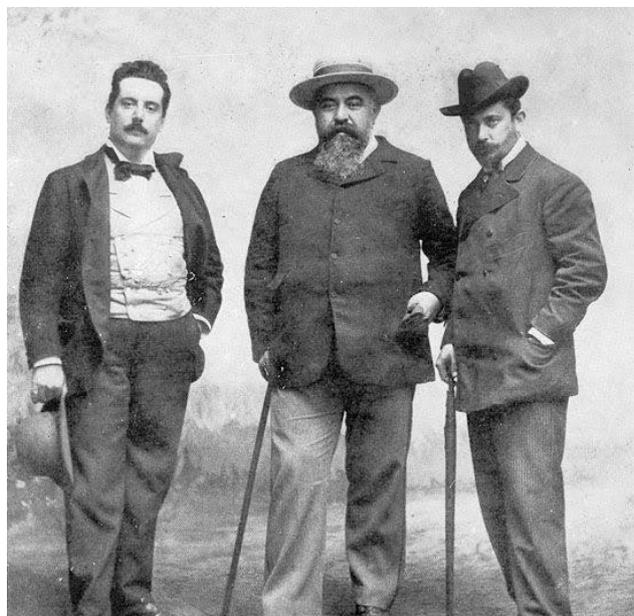
『トスカ』

1900年初演

『蝶々夫人』

1904年初演

と続けざまに、オペラ史に燦然と輝く三曲が産まれた。



左よりプッチーニ、ジャコーザ、イルリカ

<https://ameblo.jp/opera-novella/image-12773447178-15199932012.html>

当然のようにイタリアが生んだ巨匠：ヴェルディを凌ぐほどの人気を博した。いまだに、歌劇は、この三曲で満腹になってしまうファンが多い。同時代の巨人ヴェルディもワーグナーも見えなくなるのだから、始末に終えない。人気には、芸術性、神話性、ヴェリズモ性などの型ぐるしい批評は役立たずである。とにかく、劇もアリアも魅力にあふれているのだ。名曲とは、何度聴いても感動するものであろう。いつまでも廃れない。

女性関係

彼は、ほとんどの自らのオペラに別嬪ソプラノを主人公にしたほど、美形・美声にこだわったのに、プライベートでの女性関係は淡泊で、美女をあさることもなかった。売れ始めると、数々の女性歌手との付き合いもあったはずなのに、人気沸騰する著名な作曲家になって、年商数億円も稼いでも、浮名を流すことはほとんど無かった。

やがて正式に結婚する女性とは、若い時に駆落ちした人妻であった。妻の夫が死ぬまで、内縁のまま婚姻届けができなかった。子供は、息子一人だったという。まったく、歌劇史上、燦然と輝く青色超巨星であったのに、私生活では花を求めなかった。ちなみに、ヴェルディは赤色超巨星と私はなぞらえている。ヴェルディも余分な花を求めなかった。

(2) 才能

1880年から1883年までミラノ音楽院にてアミルカレ・ポンキエルリとアントニオ・バッジーニに師事。1882年(24歳)には、出版社ソゾーニョ社主催による一幕物オペラの作曲コンクールに参加、落選したが、提出作品『妖精ヴィルリ』は、後に1884年(26歳)に舞台化され、彼の光る才能は、出版社リコルディ社主

ジュリオ・リコルディ

に注目されるきっかけとなった。こうしてリコルディ社の依頼によって作曲されたのが、1889年に完成された2作目のオペラ『エドガール』である。1891年には、トスカーナ地方の**トルレ・デル・ラーゴ**に別荘を購入し、終生にわたって仕事場兼自宅とした。プッチーニの亡骸が眠っているのもこの地である。

(3) ヴェリズモ・オペラ

1880年～1920年頃、イタリアの聴衆は**ヴェリズモ・オペラ**（**写実主義オペラ**とか**現実主義オペラ**とも訳される）に熱をあげた。

出版社ソニーニョ社主催による1幕物オペラの作曲コンクール 優勝作品

ヴェリズモ・オペラの中心的人物は**マスカーニ**（1863-1945）とレオンカヴァッロ（1857-1919）であった。つまり19世紀末の文学思潮に始まるイタリア・ヴェリズモの口火となり、ワーグナーに対する最大の反撃でもあった。それらはマスカーニ『**カヴァレリア・ルスティカーナ**』（1890年）とレオンカヴァッロ「道化師」（1892年）であった。この2つのオペラは1幕もの形態をとり、自然な舞台の流れをねらうヴェリズモ・オペラの古典的な名作となった。

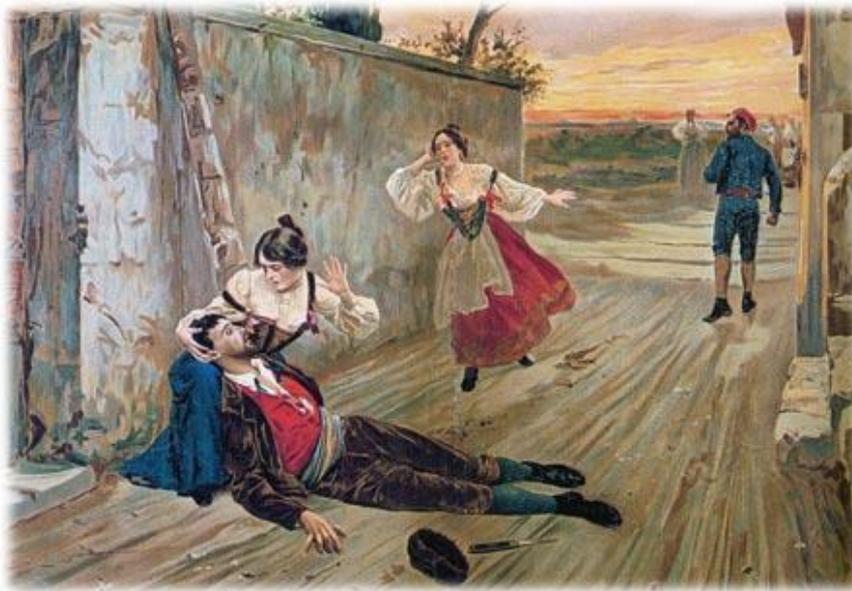
『カヴァレリア・ルスティカーナ』 あらすじ

トゥリッドゥは、アルフィオの妻ローラと浮気。

トゥリッドゥとローラは、かつて恋人関係であったが、よりを戻した。

アルフィオは妻の浮気を知り激怒。トゥリッドゥとアルフィオは決闘。

アルフィオがトゥリッドゥを殺す。悲しみの中で、オペラは終わる。



<https://tsvocalschool.com/classic/cavalleria-rusticana>

のちにプッチーニはマスカーニと貧乏作曲家どうしの友人関係になった。それが、『ラ・ボエーム』という貧乏芸術家が集まったドヤ街の生活を浮き彫りにした。

ヴェリズモ・オペラは、音楽手法も直接的な劇的效果をねらい、強烈で激しい表現がみられる。歌手による激しいフレーズ、管弦楽はしばしば興奮のつぼに達する。だがこのような表現様式は、長編オペラには向かない。例えていうならば交響曲に対する交響詩のような存在がヴェリズモ・オペラである。しかし、この1890年代のヴェリズモ運動を誰も繰返すことができなかつた。マスカーニもレオンカヴァッロ自身も繰返すことができなかつたのであつた。時代の一瞬に咲いた花のようでもあるが、そのオペラ史における意義は大きい。こうした流れを辿っている時、**プッチーニ**がイタリア・オペラの世界に登場してきたのである。

(4) 制作と拘り

台本への注文の多さと細かさ

プッチーニ・オペラは、その音楽も題材選びも国際色豊かな特徴をもっている。すなわち国際的な題材選びや世の動きに敏感で、異常に熱心に台本作りをした。「いい台本がなくては私の音楽は役立たない」と自身で言っている。だから、台本作家二人は彼の注文の多さと細かさに辟易したらしい。時には、彼らは匙を投げて逃げ出した。プッチーニは、それほど彼らを傷付けたと感じた風もなく、忘却して、次の作品でも繰返したというから、頑固な執拗さには関係者が呆れたという。

音楽についても“私は聴衆に一步先んじるが、決して数歩は先んじない”とも言っている。たしかに新しい音楽の要素を用いても、革新的といわれることもない。「トスカ」や「蝶々夫人」のような作品は、初演では受入れられなかつたが、その真価はその後すぐに認められた。自分は“劇場のために作曲することを神に命じられた”と自認している通り、オペラの重要な作曲家となつていった。最後まで独善的な自己陶醉に陥ることなく、

良質で娯楽性のある劇場音楽

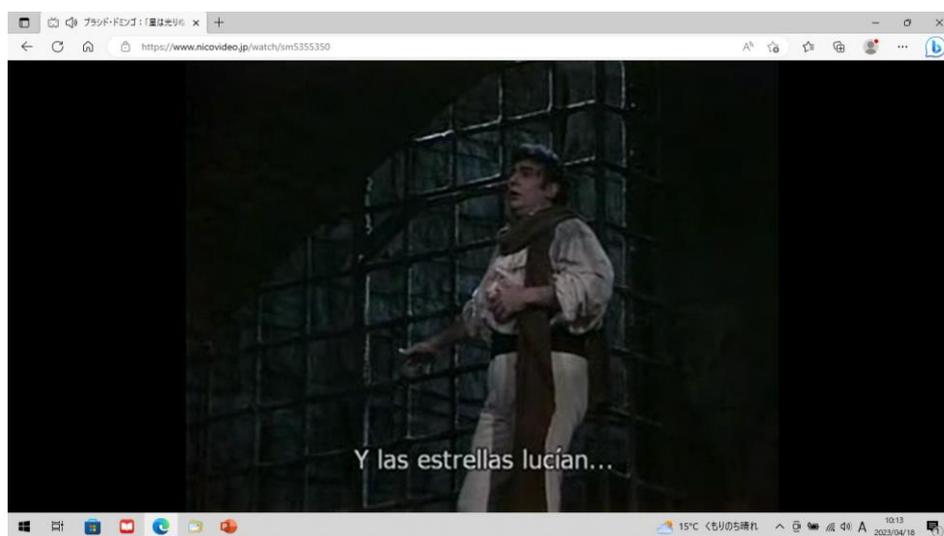
をめざし続け、その目的を十二分に果したと言える。彼の選んだ題材は万人の共感を得るし、音楽の感情表現にすぐれ、特に哀切の極みにあらわれる旋律と管弦楽による効果的な人物描写は絶妙である。

(5) 『星は光りぬ』

歌劇『トスカ』の台本の仕上げにおいて、プッチーニが最後まで納得しなかつたのは、第3幕で歌われるトスカの恋人カヴァラドッシの「告別のアリア」であつた。台本作家のイルリカはこの場面のために、カヴァラドッシが「イタリア統一」の旗を掲げた激的な革命運動家であつたことから、哲学的な味わいを秘めた壮大な詩を書いていた。それはヴェルディが絶賛していたが、プッチーニは本能的に全く違う想念を抱いていた。そ

ここで、イルリカのけっこうな原作に文句をつけて、書き直しを執拗に要求したが、イルリカは頑として応じなかった。このため、プッチーニは勝手に行動を起こした。つまり、カヴァラドッシが処刑前に牢獄で歌う旋律を己の感興に合わせて作曲してしまい、下手な歌詞もそれに合わせてあつらえる。そして、イルリカ、ジャコーザ、リコルディの三人にピアノの弾き語りで聴かせた。

“星は光りぬ” by プラシド・ドミンゴ



[Plácido Domingo - Puccini: Tosca, "E lucevan le stelle" \(Official Video\) - YouTube](https://www.youtube.com/watch?v=sm5355350)

その曲こそ、いまや超人気の名曲『**星は光りぬ**』である。さすがに3人は首を垂れて脱帽した。プッチーニが意図したものは、革命や政治的な観念ではなく、愛する女性と人生に別れを告げる男の偽りのない心情の吐露であった。即座に、イルリカとジャコーザは、プッチーニの本意に合点して本格的な歌詞を書き上げた。それが、現在の名歌となった。しかも、余りにも出来すぎて、『星は光りぬ』の方が女性の人気では『歌に生き、恋に生き』を、凌駕してきた。

そして、トスカの熱情とカヴァラドッシの男の真情という対比が産まれた。

まさに、『**星は光りぬ**』がトスカの燃焼『歌に生き、恋に生き』を凌ぐことになり、オペラ『トスカ』における核融合反応を叶えて、この歌劇全体をオペラ界の天辺に押し上げた。

これで、二人は見事に燃え尽き、世界中の淑女の心を虜にしてしまった。

プッチーニの凄みが、如実にあらわれたともいえる。

『星は光りぬ』歌詞

<https://tsvocalschool.com/classic/e-lucevan-le-stelle/>

E lucevan le stelle(星は光りぬ)の歌詞 1	<p>E lucevan le stelle ed olezzava la terra, stridea l'uscio dell'orto, e un passo sfiorava la rena, entrava ella, fragrante, mi cadea fra le braccia.</p>	<p>星は輝いていて、大地は豊かな香りがしていた 菜園のドアは(キーキーと)音を立て、 足が砂に軽く触れて 彼女がいい香りをさせて入ってくる</p>
E lucevan le stelle(星は光りぬ)の歌詞 2	<p>Oh! dolci baci, o languide carezze, mentr'io fremente le belle forme disciogliea dai veli! Svanì per sempre il sogno mio d'amore. L'ora é fuggita, e muoio disperato, e muoio disperato. e non ho amato mai tanto la vita !</p>	<p>ああ、甘いキス、切ない愛撫 その間私は震えながら美しい姿からヴェールを とった 私の愛の夢は永遠に消え失せた 時は去り、 そして私は絶望して死ぬ、絶望して死ぬ。 私は今までにこれほど命を恋しく思ったことがない！</p>

<ブッチーニのオペラ作品>

作品名	初演年月日	初演場所	
レ・ヴィルリ(妖精)	1884 03/31	ミラノ	ダル・ヴェルメ劇場
改訂版	1884 12/26	トリノ	王立劇場
エドガール	1889 04/21	ミラノ	スカラ座
第2版	1892 02/28	フェラーラ	市立劇場
第3版	1905 07/08	ブエノス・アイレス	オペラ座
マノン・レスコー	1893 02/01	トリノ	王立劇場
ラ・ボエーム	1896 02/01	トリノ	王立劇場
トスカ	1900 01/14	ローマ	コスタンツィ劇場
蝶々夫人	1904 02/17	ミラノ	スカラ座
改訂版=ブレーシア版	1904 03/28	ブレーシア	グランデ劇場
西部の娘	1910 12/10	ニューヨーク	メトロポリタン歌劇場
燕	1917 03/27	モンテ・カルロ	オペラ座

3部作			
①外套 ②修道女アンジェリカ ③ジャンニ・スキッキ	1918 12/14	ニューヨーク	メトロポリタン歌劇場
トゥーランドット	1926 04/25	ミラノ	スカラ座

(6) 最後

1858年から1924年までの二世紀にまたがった66年の人生である。音楽家としては偉大であり、比較的長い人生であるが、最後は咽喉癌を患って永眠した。

<プッチーニの死—喉頭癌>

1924年2月、この時彼は喉の痛みを感じ、しつこい咳に悩まされる。オペラ「トゥーランドット」の作曲は順調であった。3月には主治医とミラノの専門医に診せている。この二人の医者はリューマチ系の炎症とし、問題なしとした。そしてすすめに従い、パルマ近くの保養地サルソマッジョーレで5月最週に治療を受けた。「トゥーランドット」は、最後の二重唱とフィナーレだけが残されていた。彼としてはほんの数週間もあれば完成できると思っていた。



[Giacomo Puccini - ジャコモ・プッチーニ - Wikipedia](#)

長年の親友シビル・セリグマンが1924年8月末、ヴィアレージョのプッチーニの自宅を訪ねた時、プッチーニは絶えず喉の痛みを訴えていた。

10月8日、ついに二重唱の3つめの歌詞を受け取り、大満足する。10月初め、スカラ座のリハーサル室で、トスカニーニや台本のシモーニも立ち会って会合がもたれた。この時のプッチーニの弱り切った姿を見てトスカニーニは愕然とする。

10月になってからプッチーニの状態はますますひどくなり、意を決してヴィアレージョの専門医に見せたが、特に何も認めなかった。しかし、今度はプッチーニ自身の不安はおさまらなかつた。彼は家族には内緒でフィレンツェの専門医に赴いたところ、乳頭腫（小さな乳首状の腫れ物）で悪性の腫瘍ではないと診断された。それでも不安はおさまらず、アントニオにこのすべてを告げた。アントニオは直ちにその医者に手紙連絡を取り、再度診察を受けさせることにした。その結果、医者は秘かにアントニオに喉頭癌で、しかも手遅れで手術も及ばないと告げた。

1924年11月4日ついにブリュッセルへ向けて出発した。同行したのは息子のアント

ニオとプッチーニの養女フォスカ、リコルディ社を代表してクラウゼッティの3人であった。妻エルヴィーラは夫の病気の真実をまだ知らず、彼女はひどい気管支炎を起こしていたのでヴィアレージョに残った。プッチーニは「トゥーランドット」の最後の愛の二重唱とフィナーレのスコアの草稿（36 ページ分）を持参した。途中、汽車の中で彼はひどい吐血をした。台本のアダーミに宛てて“ブリュッセルにて 私は、ここにいる！ 哀れなるかな！ これから、6週間もかかるそうだ！ ……（略）……だが、「トゥーランドット」はどうなるだろう？”

11月28日午後6時頃にプッチーニは突然、治療の椅子の中で心臓麻痺を起こした。すぐ針が除かれ、注射が行われた。医者たちはこの心臓麻痺を一時的なものと考えていた。しかし、この苦しみは10時間も続き、この間イタリア大使が見舞いに訪れた。ローマ教皇大使も訪れ、病者の塗油の秘跡をまだ意識のあるプッチーニに授けた。そして1924年11月29日、ついに息を引き取った。……………

歌劇『トスカ』 あらすじ

主な登場人物	詳細
フローリア・トスカ(ソプラノ)	有名な歌手、主人公
マリオ・カヴァラドッシ(テノール)	画家でトスカの恋人
スカルピア男爵(バリトン)	ローマ市の警視総監
アンジェロッティ(バス)	前ローマ共和国統領、脱獄してきた政治犯
スポレッタ(テノール)	スカルピアの副官
堂守(バス)	聖アンドレア・デラ・ヴァレ教会の番人

あらまし

1800年6月：ナポレオン軍が欧州で勢いを増し、ローマ共和国が廃止され教皇国家が復活した頃、カヴァラドッシ（画家）はアンジェロッティ（脱獄してきた政治犯、前ローマ共和国統領）の逃亡を手助けします。そのことが明らかになり、カヴァラドッシはスカルピア（警視総監）に捕らえられ死刑が告げられます。

第1幕：『トスカ』のあらすじ

1800年6月、ローマ
ナポレオン率いるフランス軍が勢いを持つころ、アンジェロッティが教会に逃げ込んでくる

聖アンドレア・デラ・ヴァレ教会

脱獄した囚人・アンジェロッティが無人の教会に逃げ込んでくる。
そして妹が隠してくれていた鍵を探し出すと、鍵を開け礼拝堂へ入っていく。

アンジェロッティ：前ローマ共和国統領、脱獄してきた政治犯。

このオペラの直前までローマの統領であったが、教皇国家が復活したために失脚し投獄されていた。

入れ替わりに堂守が現れ、続いて画家カヴァラドッシが登場。カヴァラドッシが書きかけの絵のカバーを取ると、そこには最近この教会に祈りに来ている女性がモデルの絵がある。

カヴァラドッシはそのモデルの絵と比較しながら、自身の恋人の美しさを称える。



聖アンドレア・デッラ・ヴァッレ教会(現在)

<http://www.nakash.jp/opera/2009roma/12standrea.htm>

歌劇「トスカ」 第一幕 序曲・アリア Recondita Armonia # 絶妙なる調和 ♭

この祭壇の前で、トスカとカヴァラドッシは愛の二重唱を歌う。

Recondita armonia (妙なる調和) の解説 (歌詞・対訳) ～トスカ～

「ラ・ボエーム」「蝶々夫人」などのオペラの傑作を生み出しているプッチーニだが、その中で「トスカ」は最高人気のある作品の一つ。

本編では、いきなり、テノール・アリアの名曲『**Recondita armonia (妙なる調和)**』を披露して観客を圧倒する。カヴァラドッシというトスカの最愛の恋人が歌う豪華な序曲とも思える。

堂守はBasketのパンが減っていないので「断食でもしてるのか？」と尋ねる。カヴァラドッシは「お腹が減っていない。」と答える。

堂守は立ち去っていく。

アンジェロッティが友人カヴァラドッシの再会

堂守が去ると、アンジェロッティ（脱獄囚）が友人カヴァラドッシの前に現れる。カヴァラドッシはアンジェロッティの逃走を助けることを約束。

そこにカヴァラドッシの恋人、トスカが現れる。

アンジェロッティはBasketにあった食べ物とワインを貰って急いで身を隠す。

カヴァラドッシと恋人トスカの愛の二重唱

するどい観察眼のトスカは鍵をかけていたことを疑い、誰か女がいたのかと問い詰める。

(Mario, Mario, Mario!)

カヴァラドッシは何とか誤魔化し、トスカに愛を伝える。そして、今夜の演奏会が終わったら2人で別荘に行くことを約束。

「Mario, Mario, Mario!」

カヴァラドッシとアンジェロッティが教会から逃げる

トスカが立ち去ると、カヴァラドッシはアンジェロッティに逃げ道として別荘までの道のりを教える。そして、もし何かあったら庭の井戸に隠れるよう助言。

そのとき脱獄を知らせる城の大砲が鳴る。

二人は急いで教会を立ち去る。

そこへ堂守が戦争の勝利を知らせに来るが、カヴァラドッシがいなかったのでっかり。

堂守は少年たちと勝利を喜ぶ。



<https://i0.wp.com/www.musicalandoperawithkids.com/wp-content/uploads/2018/01/5a4a9a3921000017005f693f.jpg?ssl=1>

残忍な警視総監スカルピアの登場

しばらくすると警視総監スカルピアがアンジェロッティを探しにやってくる。残忍なスカルピアは、教会内でアンジェロッティの形跡を探し始める。

堂守は「礼拝堂のドアが開いていること」に気づき、それを伝える。さらにスカルピアはアッタヴァンティ家の紋章の入った扇子も見つける。
(アッタヴァンティ・・・絵のモデルで、脱獄囚アンジェロッティの妹)
その後、バスケットの食料が減っていることにも気付く。
スカルピアは「カヴァラドッシが脱獄囚の逃亡に関係している」と疑う。

警視総監スカルピアとトスカ



<https://i0.wp.com/www.musicalandoperawithkids.com/wp-content/uploads/2018/01/ascot-1.jpg?ssl=1>

部下にトスカを尾行させる

そこにトスカが現れる。カヴァラドッシがいなくなっているのを見て、嫉妬深いトスカは彼の浮気を疑い出す。スカルピアはトスカにアッタヴァンティ家の扇子を見せて、嫉妬心をあおる。

トスカは怒って教会から出ていく。スカルピアは、部下のスポレッタにそれを尾行させる。

トスカに対する恋心を情熱的に歌う。教会ではテ・デウムが始まり、彼もその祈りに和しつつ、目指す男とトスカを二人とも手に入れるのだと歌う。



<https://ontomo-mag.com/article/column/tous-les-chemins-menent-a-opera2/>

テ・デウム - Wikipedia

テ・デウム(Te Deum)は、キリスト教のカトリック教会・ルーテル教会^[1]・正教会^[2]の聖歌の1つ。テキストの冒頭の一文“Te Deum laudamus”(われら神であるあなたを讃えん)からこの名称で呼ばれる。曲種としてはイムヌス(賛歌)に分類される。聖アンブロジウスにより愛弟子の1人へ洗礼を授ける際に即興で作られたとされ、アンブロジウス聖歌からグレゴリオ聖歌に採り入れられた。

第2幕:『トスカ』のあらすじ

カヴァラドッシは厳しい拷問を受ける

ファルネーゼ宮殿にあるスカルピアの部屋
スカルピアのもとに部下・スポレッタが帰ってくる。
そして、「首領アンジェロッティは逃したが、カヴァラドッシを捕えた。」と伝える。

カヴァラドッシは厳しい拷問を受けるが、「何も知らない」と言い張る。
しかし、トスカが恋人の拷問に耐えきれなくなり、「庭の井戸の中にアンジェロッティがいる。」と告白してしまう。



<https://ontomo-mag.com/article/column/tous-les-chemins-menant-a-opera2/>

カヴァラドッシが収監される

拷問から解放されたカヴァラドッシは、トスカが居場所を教えたことに怒る。
しかし、そのとき戦争の敗北（スカルピアのいる軍の敗北）の知らせが舞い込む。
カヴァラドッシは勝利を叫ぶ。逆上したスカルピアは「死刑囚、絞首台がおまえを待っている。」と叫び、部下に外に連れていかせる。
カヴァラドッシは死刑が宣告され、収監されてしまう。

トスカの哀訴

残ったトスカはスカルピアに「カヴァラドッシを助けてくれるよう」哀訴する。スカルピアは対価として彼女の身体を要求。

トスカはその苦悩を歌い (Vissi d' arte, vissi d' amore) 、要求を受け入れる。

「Vissi d'arte, vissi d'amore(歌に生き、愛に生き)」 ～トスカ～



<https://mainichi.jp/articles/20190312/org/00m/200/003000d>

スカルピアは部下・スポレッタに「銃殺のふりだけして、カヴァラドッシを生きすよう」命令する。スポレッタは（虚偽の命令と）了解して、その場を去る。

本当はそうではなく、事前に「何を言われてもカヴァラドッシを銃殺する」ように命令している。

トスカはさらに「2人で逃亡するための通行手形」を要求。

その隙に、乱心しているトスカはテーブルのステーキ・ナイフを手にとって隠し持つ。スカルピアが手形を書き終え、トスカを抱こうとしたときに。

トスカがスカルピアをナイフで刺し殺してしまう。



<https://ontomo-mag.com/article/column/tous-les-chemins-menent-a-opera2/>

トスカは息絶えたスカルピアから通行手形をもぎ取り、部屋を出ていく。

第3幕:『トスカ』のあらすじ

カヴァラドッシの極上のアリア

サンタンジェロ城の屋上

カヴァラドッシが収監されている。

カヴァラドッシは看守にトスカへの指輪を託し、さらに手紙を書きだす。

そして手紙の途中で感極まり、愛と絶望、命の惜しさを歌う。

E lucevan le stelle(星は光りぬ)の解説(歌詞・対訳)～トスカ～

[新国立劇場オペラ「トスカ」ダイジェスト映像 Tosca - NNTT - YouTube](#)



プッチーニは人気のあるオペラをいくつも残しており、その中でも「トスカ」は世界中で頻繁に演奏されているオペラの一つ。その「トスカ」の中でカヴァラドッシ(テノール)が歌うアリア。

そこにトスカが現れます。

トスカはカヴァラドッシに通行手形をみせ、これまでの出来事を伝え、スカルピアを殺したことも告白する。そして、「見せかけの処刑があるから、撃たれたら倒れるように」と頼む。

二人は自由を喜ぶが。

カヴァラドッシとトスカの死

処刑の準備が整い、カヴァラドッシは処刑台へと進む。
そして銃声が聞こえると、トスカは倒れたカヴァラドッシのもとへと向かう。
しかし銃声は空砲ではなく、カヴァラドッシは既に死んでいた。
「空砲で見せかけの処刑」は嘘だった。



https://www.youtube.com/watch?v=gf0p_YkC5rM

その時「スカルピアが殺害された！犯人はトスカだ！」という知らせが入る。
絶望したトスカが屋上から身を投げ、自らの命を絶つ。

終幕

エピソード

最後はあつけない。

森鷗外は、「臨終は中断だ」と言っただけらしい。まだ終わってない、見足りてない、その後はどうなるのか？ 観客がいくら問うても、死んだ本人はその問いすらも何もわからない。

歌劇『トスカ』の終わり方は、人生の幕の閉じ方として「スパッと切ること」を現実にして、歌劇自体でそれを演じてみせた。いくらジタバタしても、いくら悔いても、いくら反省しても、そんな物語の作り方はおかしい、と喚いても、もう終わりなのである。だから、「死は中断」なのだ。それは誰も演出できない。トスカはそんなことに悩まない。一途なのだ。それをプッチーニは言いたかったのかもしれない。

やがて、プッチーニ自身も最後の歌劇『トゥーランドット』の制作中に癌で他界することでその経験を一回だけ味わって、作曲を「中断」してこの世を去る。

トスカは、いずれにしても悩まない。カヴァラドッシのいない現生に未練はない。いや、意味がないから投身自殺したのだ。

蓋し、一途である。

キリスト教カトリック教団は自殺を絶対的に厳禁している。その結末としてのキリスト教信者に対する残虐な脅しとしての火炙りの刑でさえも、かなわなかった。絶対に信念を曲げない、ゆずらないのである。厳しい生き様である。

ところが、トスカはそんな宗教の身勝手な教義など一瞥もくれず、惚れた男との間には消し去っていた。いわば、現代的な個の信念である。凄まじいとしか言いようがない。神に対しても妥協がないのである。

スカルピアの強欲に目をつぶればよかったのに。

いや、それでは、トスカの生き様が鮮やかに投影されない。名歌劇として慕われない。美しくない。私は、トスカのそんな一途さに、いつも感涙している。

次は、イタリア歌劇の三大作曲家の残りのベルリーニになるが、『椿姫』、『トスカ』、『ノルマ』という三大名作を聴けば、オペラのフリーク達と夜どうし談じても畏れることはない。